

Title	昭和十二年春季 武藏國分寺立川方面旅行記
Sub Title	
Author	中井, 信彦(Nakai, Nobuhiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.3 (1937. 11) ,p.159(487)- 161(489)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19371100-0159">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19371100-0159</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 彙

# 報

## 昭和十二年 春 武藏國分寺立川方面旅行記

昭和十二年六月十三日（日曜日）曇勝

柴田常恵先生の指導の下に、一行は間崎、松本（芳）、今宮の諸先生、並に内藤智秀氏、先輩保坂、會田の兩君、それに學生十三名であつた。午前八時廿分新宿驛から貸切りの遊覽バスで出發。今にも降り出しさうだつた空も、出發頃には幾分明るくなつて來た。

甲州街道を一氣に西へ、八時五十五分府中の一步手前、國府八幡宮の前に下車。杉森の中、眞直な石疊の奥に國府八幡は鎮座する。どこの國府にも鎮護として祀られた筈であるが、それが合祀もされずに、かうしてそのままになつてゐるのは少いといふ。今は總社たる國幣小社大國魂神社の攝社とされてゐる。杉の木立を通して府中競馬場の華麗な建物が見える。競馬と八幡、一寸面白い取合せだと思つた。參拜を終り、再び車に乗る大國魂神社の前で右に折れ、八幡太郎義家の寄進と傳へられ、天然記念物にも指定されてゐる有名な馬場大門の櫓並木をくぐる。これは櫓の生育に適する關東地方に於ても隨一の大並木である。殊に道の東側にある大櫓は幹圍八米に及び、人目を引く。中央線のガード前手で

下車。左手の小高臺は四谷新見附埋立の爲に土取りした際、繩文式時代の竪穴の發見された所である。竪穴の殘部も少しばかり見えるし、繩文式土器の破片も附近に落ちてゐる、そのままになつてゐる南斜面の邊りには未だ竪穴があるかも知れない。

こゝから國分寺址までは程近い。講堂址の邊りで車を下りる。暫くは目星しい古瓦の採集に賑ひ、雨の用意に持つて來た傘が大に役立つ金堂の址にも土壇が残り、七間四面の建築を想はせる礎石も遺つてゐる。この金堂址から眞直に南へ向ふ里道がそのまゝ往昔の國府への大路なのである。約百五十米も前に幾らか高くなつてゐる邊りが大門の址で、此處にも古瓦の破片が散亂してゐる。次に金堂址の東南に當る塔婆址を見る。圓柱孔のある心礎の中に配された十個の礎石は四間四面、七重の塔婆を目前に畫き出させる。

此處から一旦現在の國分寺に行く刺を通じ、寺僧の案内で藥師堂に安置された國寶藥師如來坐像を拜觀する。高さ一間程の木造で、右手に施無畏の印を結び、左手に藥壺を持つ相好の頗る端嚴な中に又極めて圓滿なのは、鎌倉時代（中期）の製作を示すものであらう。藥師堂を出て石段を下りると仁王門がある。大體此の邊りが昔の北院に當るのであらう。藥師堂や仁王門には當時の礎石が用ゐられてゐる。

仁王門をくゞつて西へ、下河原貨物線を越えた所に横穴がある。これは先頃土砂採取中に開口したもので、穴の入口には石材を用ゐ、玄室との間はアーチの様造り、内部には探色の跡が見える。技巧から言つても奈良朝に入つてゐるであらうから、國分寺僧の

墓ではなかつたか——とは柴田先生一流の解釋である。横穴のすぐ右手、鐵道線路にそつて鎌倉古道がその俤を残してゐる。嘗ての賑かな往來に引反へ、今は里人さへも餘り通らぬ様子で、兩側から覆ひ被さる様な青葉も何となく人待顔である。

此處から少し南に行つた所が西院址と言はれ、礎石が残こり、古瓦が散亂してゐる。然し此處までも國分寺の境内に入れるとすれば、餘りに廣大に失し、然も他にこれの發見されぬ以上、こゝが尼寺の址なることは殆んど疑ふ餘地がない。再び東して僧房址から本堂に戻り、寺寶の古瓦を見る。文字瓦、唐草瓦、巴瓦等種類が並べられてゐる。文字は那名が多く、郷名、人名も存するといふ。印判を押したものの篋で書いたもの等の相違が見える。又附近から出土した正中三年二月十九日及び應安七年五月五日の銘ある二枚の板碑がある。殊に前者は三尊來迎を刻した立派なものである。この外矢張り附近から出土した石棒、石皿等の石器類も若干あるこの石棒は兩頭であるが、片方の頭が磨滅してゐるのは實用に供した爲めかとも思はれ、石棒の性質を考へる上に大きな示唆を與へる。かくて寺を辭した時には、時計はもう午を廻つてゐた。

先の道をそのまま戻つて大國魂神社に至る。參拜の後、社務所で古鏡を見る。大體鎌倉時代から江戸時代に至る間のものであるが、蓬萊鏡の圖案の變化が手に取る様に見えるのは興味深い。此等の鏡はもと各部落より出だす御輿に垂れたものなので、皆一穴が穿つてある。又社殿改築の際に長押から出たといふ神像、佛像もある。室町時代から江戸時代に至るもので、簡素ながら出來の

良いのもある。かくて一旦此處を辭し、神社の傍で中食を探つたのは既に二時近くであつた。

漸く溢る御輿を上げて、先づ神社の隣にある府中史談會の出土品陳列館に入る。此處には附近から出土した石斧、石鏃、石劍等の石器に土器、古瓦、板碑等が相當數多く並べられてゐる。次に大國魂神社の神職猿渡氏の墓地に赴く。その墓碑の基礎石に用ゐられてゐるのが塔の心礎である。然も此の附近に古瓦の散亂してゐる以上、此邊に寺が存したと見ねばならない。この寺と國分寺とか如何なる關係にあつたか、此は一つの興味ある問題であらう。

此處から神社を横切つて善明寺内の金佛堂に行く。有名な鑄鐵の阿彌陀如來像(國寶)は高さ約一間程であるが、餘程鑄惡かつたのであらう、可成り粗雑な様に思はれた。然し、胎内の小鐵佛は立派なもので、たゞ面相を充分拜し得なかつたのは残念であつた。製作も同期の様である。さて金佛の左肩に次の様な鑄出銘がある。

銘曰

大勸進阿彌陀佛、明達大工藤原助近右志者、過去二親嚴新發意、乃至法界衆生平等利益、奉鑄一丈二尺佛身也、

建長五年<sup>癸丑</sup>二月十八日<sup>庚辰</sup>彼岸初日

薄暗い小さなお堂には收められてゐるが、人々にとつては昔から御利益の顯かな佛様であつたに違ひない。ふと見ると小さな額が掛つてゐる。「むさし野の昔をしのぶ あみだぶつ、願へはすくう、ほとけなるらん」出て見るとお堂の構子戸に小石やブリキ製の草鞋が結び付けてあるのが目に付いた。

暫く待たせてあつた車を驅て立川に向ふ。途中谷保天満宮に建  
治元年藤原經朝の書いた額を見ようと立寄つたが、相憎神主は不  
在、耳の遠い老翁が幾日振りかの日差しに書見してゐるばかりで  
あつた。車は更に西して勢よく立川なる普濟寺に乘入れた流石に  
立川氏の居城であつた所だけに、南に多摩川を望んだ景勝の地、  
然も境内が相當に廣い。そこには尙ほ土壘の一部さへ残つてゐる。  
かうした周圍の中に有名な國寶六面幢は立つてゐる。

延文六年辛丑七月六日 施財性了立 道丹刊

の銘が示す通り、吉野朝時代のもので、六枚の板石に火焰附の後  
背を負つた四天王及び仁王の立像が一軀づゝ浮彫されてゐる。靜  
寂な周圍とよく融け合つて、落付きのある美しさを感じさせる。  
こゝでは記念の撮影が盛に行はれた。この邊り、庭園に配された  
寶篋院塔は室町頃のもので、又縁に側つて二十幾枚かの板碑が周  
らしてある。聞けば未だ裏にもあつて、全部で八十枚位だといふ。  
茶菓の接待を受けた、本堂に安置された開山物外和尚の倚像（國  
寶）を見る。木造に黒漆を施したものであるが、非常に個性を強  
く表はし、驚くべき程寫實的に造られてゐる。胎内に應安三年十  
一月の銘があるといふ。最後に大分塵に塗れた韋駄天立像を住職  
が持つて來られた。見ると次の様な背銘が刻まれてゐた。

玄武山普濟禪寺

時元祿五<sub>甲午</sub>年十月吉日

神田町壹丁目

作者佛作師奥永内藏丞爲慶

住持比丘

彙報

月潭玄圓記焉

かくて寺を辭し、甲州街道を一氣に疾驅して新宿驛に歸着、解  
散したのは六時を少し廻つた頃であつた。この日は幸ひ比較的天  
候に恵まれ、又近距離の見學であつたため、樂な氣持ちで史囊を  
肥し得たのは何よりであつた。（中井信彦記）